

セミナー印象記

田窪祐子

昨年10月4日、東大で開かれた地域社会学会と日本村落研究学会との共催セミナーに参加させて頂いた。私自身はどちらの学会にも所属していないが、似田貝氏が報告された新潟県巻町の住民投票運動を調査していたことから、セミナー事務局より声をかけて頂き、幸運にも出席することができた。示唆に富んだたいへん興味深いセミナーで、貴重な機会を与えて頂いたことに心から感謝したい。以下では、主に似田貝氏の報告についての感想を述べて、当日できなかった発言に代えさせて頂きたい。

巻町の原発をめぐる住民投票は、地域の意志決定、新しいタイプの住民運動、国家と地域の関係性、等々、非常に多様な問題を提起している興味深い事例である。似田貝氏は、これを「住民意志のリプレゼンテーションの回復」という切り口から分析され、住民投票が「沈黙性－匿名性の政治」からの脱却の契機となった点を指摘した。さらに、住民投票を人々の生活世界とつながった形での討議実践の場として位置づけ、住民意志の代表の回復の一つのあり方として提示した。

私自身、巻町や御嵩町、串間市など住民投票運動が展開されている町の人々の「声」をいくらか聞いてきて、似田貝氏の言われたように住民投票は町の人々が「声を出す」契機となったことを強く感じた。この意味で、主体形成（こころ）から共同関係形成（声）へのプロセスとしての住民投票、という似田貝氏の指摘はたいへん示唆的であった。一方「住民投票」という制度が確保している匿名性－賛否どちらに投じたかは他人には分からない－も、町の人々がこれに参加することを促す要因の一つかも知れないと思う。また運動を始めることで最初に「沈黙」を破ったのが町の名望家の存在でもある保守層であったことも、住民投票運動の成功にとって重要な条件なのではと感じている。

刺激的な報告を受け、住民投票にみる日本の地域社会の「意志決定」の特性について、さらに考えていきたいと思っている。

（東京都立大学大学院）